

間諜

杉本章子

かんちよう

上卷

中公文庫



中公文庫

かん ちょう
間 諜 (上)

定価はカバーに表示してあります。

1997年3月3日印刷

1997年3月18日発行

著者 すぎもとあきこ
杉本章子

発行者 嶋中鵬二

発行所 中央公論社 〒104 東京都中央区京橋 2-8-7 振替 00120-4-34
TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部)

©1997 CHUOKORON-SHA,INC. / Akiko Sugimoto

本文・カバー印刷 三晃印刷 用紙 王子製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-202812-4 C1193

Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

蝦夷国まぼろし

上 卷

夏 堀 正 元

中央公論社

間
諜
上
卷

一一一

灼^やけつくような西日が、娘の亡骸^{なきがら}に容赦なく降りそそいでいた。

八月もなかばを過ぎて、ようやく秋めいてきたところへ、今日はまるで真夏がぶり返したような暑さである。江戸は葭^{よし}町^{ちよう}にある芸者屋えびすやの井戸に身投げしたお酌の亡骸を引き上げた二人の鳶^{とび}人足も、汗みずくになっていた。

「かわいそうにねえ」

えびすやと裏庭が隣り合った同業の玉扇屋^{たまおうぎや}のおかみお関は、垣根越しに掌を合わせた。かたわらのおむらも、それに倣^{なら}った。

花^{はな}薙^{むしろ}の上に寝かされたお酌のむき出しになった肌は茹^ゆであげたように赤く、根締めのとれた黒髪が顔から肩にかけてからみついている。亡骸のそばには、えびすやのおかみがべったりと腰を落としていた。

「お梶さんも、とんだ痛事いたことだよ」

と、お関は声をひそめて言った。お梶というのは、えびすやのおかみの名である。身投げしたお酌の死を悼いたんでいるものとばかり思っていたおむらは、啞然あぜんとした。

「糸目をつけずに銭金ぜにかねつぎこんでさ、まだ元も取らないうちに身投げされたんじゃ、泣くに泣けやしない」

えびすやのお酌はすえが楽しみな器量よしで、おかみはいずれ金箱かねばこになると大事にしていた。だからこそ、お酌が麻疹はしかに罹かかると、それ医者だ、呪まじない師だと大騒ぎしたのである。

「ま、おまえは小網町こあみちようのところに麻疹をすませてるからさ」

お関は、おむらにちらと目を向けた。

おむらは、玉扇屋の抱えである。表向きお関の娘ということになっているが、実の子ではない。十年前、十二の齡に十五両でお関に買われた身だ。

父親はその日暮らしがやつとの叩き大工で、おむらの下にまだ三人の子供がいたから、台所は火の車であった。そこへ裏店うらだなの差配が、おむら坊を芸者にしないかい、と話をもちかけたのである。差配はお関のふた従兄いとこで、下地っ子探しを頼まれていたら

しい。

「この子ほどの見目よしなら、さきは売れっ妓まぢがいなしだ。見目は果報の基つてね。土地で知られた芸者ともなりや、当節、年に百両がところは稼ぐそうだよ。なあに、養い子にするつたつて、年季はたかだか十四年。自前になりさえすりや、おまえさんがたは、それこそ左団扇さ」

と、差配は双親の欲心をそそるような言葉を並べたてた。これでおむらの将来が決まり、十二の春に小網町三丁目の裏店から、葭町のお関のもとへ売られたのである。

三味に踊りに、囃子方まで、みっちり仕こまれたおむらは、十六でお酌となったが、そのころからよくお座敷がかかった。そうして十八で一本となつてからは、わき土地にも知られるほどの売れっ妓になった。見目よし、姿よし、気性よしのうえに愛嬌があり、お座敷が光ると引っぱりだこである。

まずは、差配の託宣が当たったわけだ。しかし年に百両とはとんだ法螺で、たしかに金が入ってくるが、出て行くのもまた多い。頭の物から着る物まで、売れっ妓なり身仕舞いをしようとすれば、金、金、金である。これでは自前になつても、親は左団扇といかどうかあやしいものだ。

しかし左団扇を夢みた父親は、おむらが一本になってすぐ、膈症いがんで死んだ。母親のほうも、その二年後に風邪をこじらせて後を追った。二人の弟と妹は、それぞれ堅いお店たなへ奉公に出ていて、あまり行き来はない。

——— いったい、あたしは……。

なんのために売られたのさ。おむらはときどき腹立たしいような、やるせないような気持ちになることがある。

「うちの金箱は安泰、安泰」

お関は、隣の貧乏鴨かもの味、というような顔をしていた。おむらは死んだお酌がかわいそうで、お関をちょっといたぶってやろうと思い、家のほうを振り返って言った。

「あたしはすませてるからいいけど、寅とらちゃんが心配ねえ、おっかさん」

寅太というのは、お関の実の息子で、今年十四になる。強そうな名まえだが、これがとんだ張り子の寅で、年が年中、どこが痛い、ここが痛いと言っている。お関はそんな寅太を不憫ふびんがって、猫かわいがりにかわいがっている。よろず勘定ずくの節があるお関の、弱みであった。

その寅太が、まだ麻疹をすませていない。お関はいま猖獗しょうけつをきわめている麻疹を

恐れて、寅太を一步も家から出さぬようにしていた。

「そうだねえ」

と言ったのは、垣根にへばりつくようにして隣の騒動を見ていた飯炊きのおかの婆さんである。五十の坂を越した婆さんだが、足腰達者で、お関やおむらよりも食い気があり、太った体をこま鼠のように動かして働く。

「さて、もない、つまらない。こんどのはしか、のがれない……って言うもの」
婆さんは瓦版売りの口真似をしながら、おむらたちのそばへやってきた。

今年——文久二年（一八六二）六月末ごろから、麻疹が蔓延まんえんしている。子供ばかりか、大人までもが罹患するありさまで、江戸市中で数知れぬ人が亡くなったという。先月など、一日になんと二百あまりの棺桶が、日本橋を渡ったことすらあるそうだ。

「縁起でもないこと言わないどくれ、鶴亀、鶴亀」

お関はきつとして、婆さんに食ってかかった。

「すみませんことで」

婆さんは目を伏せて、神妙に頭をさげた。だが、そのあとすぐにけろりとした顔になり、猪首いぐひをのばして隣の裏庭を見た。お酌の亡骸が、勝手口へ運ばれて行くところ

であつた。

「麻疹で死んだら、体じゅうが金時みたいに赤くなるってほんとだねえ」

亡骸を見送りながら、婆さんは呟いた。

「そんなことよりも、あの子、なんだって身投げなんかしたんだろ。麻疹に罹って、悲観したのかしら」

おむらはもう一度、掌を合わせた。

「知るもんかね。おかの言うことは、まるで狐につままれたような話だもの」

お関は、まだぷりぷり怒っている。

「だって、おかみさん。あの子、わけのわからないことをわめきながら勝手口から飛び出してきたかと思ったら、井戸へどぼんだもの。あたしゃ、腰ぬかしそうになっちゃまって」

婆さんは、たまたま干し物を取りこみに裏庭へ出たところへ、お酌の身投げに出くわしたのである。腰をぬかしそうになるところか、婆さんは隣にも筒ぬけの大声で騒ぎたてた。その声で、お関もおむらも裏庭へ飛び出したのだった。

「もしかすると……薬のせいかもしれない」

おむらはいつだったか、お座敷で薬種問屋のあるじが話していたのを思い出した。
犀さいの角つゐを粉末こなにした烏犀角うさいかくという薬がある。熱冷ましに効くので、麻疹はうそうや疱瘡ほうそうがはやるたびに、飛ぶように売れるという。だが、服用もたび重なると、逆上して正気を失い、ついには発狂することもあるそうだ。発狂すると、熱に耐え切れず、水をもとめて川にはまったり、井戸に飛びこんだりすることもあるという。

「そうかい。じゃ、それだね、きつと」

ときめつけて、お関が大きくなずいたときである。寅太が勝手口から顔をのぞかせて、姉ちゃん、箱屋さんがきてるよ、と呼びたてた。

「寅太、風にあたっちゃいけないって、あれほと言ってるのに」

早くおはいり、お関は鶏でも追い立てるように手を振って勝手口へ走り、寅太の肩を抱いてなかへ入った。

「いやだ、この騒ぎでとんと忘れてた」

おむらは、汗ばんだ顔を洗いに井戸端へ急いだ。婆さんもやってきて、水汲みを手伝った。

毎月二十一日には、きまって元柳橋もとやなぎばしの船宿から口がかかる。室町むろまちの本店おおだなの隠居三

人が海釣りを楽しんだあと、夕七つ（午後四時）ごろ船宿に戻ってきて、二階で一杯かたむけるときに、おむらを呼んでくれるのだった。もう八つ半（午後三時）をとっくにすぎている。

「こんな疫病やまいがはやつてるときにさ、ちよくちよく口がかかるなんて、さすがだよ」
おかのは、わがことのように誇らしげだ。

麻疹の蔓延で有卦うけに入ったのは、医者に薬屋に棺桶屋、それに駕籠屋である。上がつたりなのが食べ物屋に湯屋、女郎屋、芸者屋だった。おむらにしたところで、十日に一、二度口がかかればいいほうなのだが、それでもさっぱり口のかからぬ近辺の朋輩ほうばいからみれば妬ましいかぎりだろう。

家のなかに入り、茶の間へ上がると、寅太が箱屋に十六武蔵むさしで遊んでもらっていた。茶の間の壁には、「麻疹護調延寿鑑はしかてあてえんじゆかがみ」という二枚続きの錦絵が貼ってある。錦絵といっても、四方の角に描かれた役者は飾りで、実は麻疹に罹ったときの養生法を教えた番付なのだ。番付は右手に食べてよい物、左手に食べていけない物がずらりと並べてある。

——食べてよき物……。

かんぴよう、とうがん、いんげん……と、こつちまで覚えちまつたよ。おむらは苦笑しながら、茶の間わきの階段へ急いだ。

——寅太は、ほんとに弱味憎だ。

うちの吉松なんか、十で奉公に上がったのに……。おむらは踏面ふみづらに足をかけながら、久しく会っていない弟の利かぬ顔を思い浮かべた。吉松は二つ齡下の弟で、おむらが玉扇屋へ売られて半年後に、本石町ほんこくちよう四丁目の紙問屋へ奉公に上がり、いまでは手代をつとめている。

——あれじゃ寅太は……。

さきゆき、ろくな男にならないよ。玉扇屋に売られたおむらは、芸事や行儀作法を仕込まれるかたわら、小女こおんな同様にこき使われ、寅太の守りまでさせられた。おぶった寅太から幾度、おもらしをされたことだろう。

濡れた背なかの気持ち悪さを思い出しながら二階の八畳に上がると、衣裳をそろえたお関が、肘かけ窓の下に据えた鏡台の前に真座こざを敷いているところだった。出が迫っているので、手伝ってくれるらしい。おむらは鏡台に向かうと、もろ肌脱ぎになつて言った。

「おっかさん、寅ちゃんのことだけど、ちょっと大事にしすぎじゃない。もっと外へ出して、隣近所の子たちと遊ばせるとか、それとも思いきってどこぞへ奉公に出して鍛えてもらうとかしたほうが、あの子のためにはよかないかしら」

「なにを言うんだよ。あのひ弱な子に、そんなことをさせられるもんか。それに、ゆくゆくは安房屋あわやを継ぐかもしれない大切な体なんだし」

水刷毛みずばけでおむらの襟もとに白粉をのばしながら、お関はりきみかえった。

安房屋とは、南新堀町みなみしんぼりちように店を構える醤油酢問屋の大店である。寅太はそのあるじとのあいだに生まれた子なのだが、安房屋にはちゃんと寅太より三つ齡上の一人息子こがいた。しかしその子は寅太に輪をかけた病身で、医者と縁が切れずにいるそうだ。

——本音が出たわね、おっかさん……。

鏡のなかの切れ長の目のはしに、薄く紅をさしながら、おむらはおかしかった。お関は、望むらくは寅太が安房屋へ直ればよいがと考えているのだ。

「さ、お化粧つくりがすんだら箱屋を呼ぶよ」

お関はおむらの顔色を読んだらしく、そう言ってそそくさと階下したへ降りて行った。かわって二階へやってきた箱屋は為吉といって、四十年配の中背の男である。

「へい。今日はどうもお暑いことで」

為吉はもぐもぐと言いながら、衣裳のそばに膝をついた。ちよつと見にははなしか嘶家かたいこ幫間かと思うくらい、角のとれた、粹な感じのする男なのに、これが驚くほど陰気なたちなのだ。しかしいつもこうして身の回りの世話をしてもらい、お座敷へ供をしてもらうからには、口軽よりもましである。箱屋に内緒ごとを言い触らされたり、有ること無いことをまき散らされたりして、泣きを見た朋輩は多いのだ。

「麻疹騒ぎさえなけりや、近所近辺がざわついて、向こう三軒両隣からは切り火を打つ音が聞こえてくる時分でござんすが……」

為吉は菊を打ち出した裾模様の紋付を取り上げると、緞子織もじおりの長襦袢姿で立つおむらに着せかけながら、ぼそぼそと言った。

「それがどうでござんしょう。このしめやかなこと……。もう、葭町はおしまいじゃありませんかねえ」

かつては「坊さま二人で葭町通いセッセ、上がるお茶屋はアレワイサノサ……」と深川節に唄われた葭町の蔭間茶屋も、いまはすた廃れてしまい、取って代わったのが芸者屋である。ふた昔前の、いわゆる天保のご改革で、深川の岡場所が取り潰しにあらうと、